

# 金沢学院大学・金沢学院短期大学

## 二〇二四(令和六)年度 入学者選抜試験問題

### 一般選抜Ⅰ期〈二日目〉

二〇二四年二月一日(木)実施

# 国語

#### Ⅰ 注意事項

解答用紙の解答科目欄に「国語」と記入・マークしてから解答してください。

問題は 1 ページから 20 ページまであります。

第3問、第4問は受験する学科・専攻によって解答する設問が異なりますので、注意してください。

問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用することは法律で禁じられています。

#### Ⅱ 解答上の注意

解答用紙は、マーク式解答用紙と記述式解答用紙の 2 種類があります。

マーク式の問題で、「解答はマーク式解答用紙 10」と表示のある問いに対して④と解答する場合は、下記の

例のようにマークしてください。記述式の問題には「解答は 記述式解答用紙」と表示がありますので、記述式の

解答用紙に記入してください。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ③ ● ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩



問題は次のページからです。

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～7)に答えよ。

心(魂、自己)についての探究は、西欧に絞っても少なくともプラトン以来二五〇〇年の歴史を持つ。哲学における心(魂、自己、意識、主観性)の探究は、自分自身についての観察によって成り立っている。つまり「心」については自分の経験をもとに探究されてきた。近代の哲学の出発点であるデカルトが「我思う故に我あり」と書き留めたのは、確実な知の基盤を、「自分自身が思考することを自分で意識できる」という内省に求めた営みだった。

内省を中心に発展した西洋近代哲学は、経験から切り離された、確実性を持つ「自己」を哲学の基盤に据えようとした。デカルトの「我思う故に我あり」も、うつろいゆくあやふやな私の経験のことではない。経験がどう変化し、あるいは夢や幻覚におちいって不確実になったとしても、悪い霊に騙されて間違った思考をしているのだとしても、「考える」という運動そのものはたしかに存在する。不確実な経験からは切り離された、確実に存在する思考の確保こそが、デカルトにおいては問題となっていたのだ。

「我思う故に我あり」という確実に存在する自己を起点としつつ、世界を認識する主観性の構造を考察するという仕方近代の哲学は発展した。世界から切り離して確立された「自己」が確保されたからこそ、世界を客観として眺めることもできるようになったのである。

これ以降の哲学の流れにおいても、哲学における「自己」「主観性」の探究の多くは、それらを経験から切り離そうとする方向性を持っていた(例外は(注1) デイヴィッド・ヒューム「一七一―一七七六」にはじまる経験論哲学である)。経験から切り離された認識主体としての「自己」があるからこそ、経験から① リダツした客観としての世界や社会も探究できると考えたのだ。ところが(注2) この流れが心理学の登場とともに変化する。

心や自己を客観的にとらえようとする実験心理学は、一八七九年に(注2) ヴァイルヘルム・ヴント(一八三二―一九二〇)がライプツヒ大学哲学部に心理学実験室を開設した年にはじまった。ただし、十九世紀末の実験心理学の黎明期においては、核となる自己の探究の補助手段として、実験が行われていたに過ぎなかった。高橋滯子の『心の科学史』によれば、ヴントの個人心理学は「内観」による「私秘的な」意識過程の分析過程を探究するものである。著者の高橋は「〈実験〉が、ヴントの場合、内観的方法に先立つ予備的操作としての、きわめて特殊な意味しか持たなかった」② 点に注意をウナガしている。ところが、ヴントの弟子の世代になったときに、実験により客観的に捉えられたデータこそが「心理」そのものであると見なされるようになる。研究者の内省ではなく、実験で測定された被験者の(注1) 「心理現象」が学問の対象となるのだ。

その後、二〇世紀にはいって行動主義心理学が登場するとの傾向は徹底する。内省は使われず、「被験者はもはや自分自身の内面の「観察者」ではなく、与えられた刺激に反応する一個の(注2) 被験「体」にすぎなくなっている」。つまり心理学が対象とする「心」は、単に測定しうる刺激に対する反応を意

味するものになるのである。心理現象とは単なるデータなのだ。高橋は続けてこう書いている。

このことは、たとえば視覚の実験がおこなわれる暗室内でのブザーや言語を用いての応答も、実験者<sup>ア</sup>と被験者<sup>イ</sup>という二人の間で取り交わされるコミュニケーションではなくなったこと、すなわち、被験者が自ら見聞きした(自ら経験しつつある)ことがらを実験者に知らせるための「合図」ではなく光や音などの刺激に対する被験者<sup>イ</sup>の「反応」(身体的応答)の一種にすぎなくなったことを意味している。そこでは実験者だけが唯一の観察者であつて、( a )、その実験者が観察している対象は、そこにいる被験者が示す「声を出す」とか「ブザーを押す」などの身体的反応の数々だけである。

日常生活において、人の「心」は誰かとのコミュニケーションをとおして「私の心」「あなたの心」として浮かび上がるものである。心と呼ばれる現象は、私からあなたへ、あるいはあなたから私へという交流の現場で生じる。ところが実験心理学においては、人工的な実験のセッティングにおける刺激や問いかけに対する「反応」が「心」であるとみなされ、人間同士のいきいきしたコミュニケーションは視野から消える。被験者が「声を出す」ことも、心情表現ではなく、ブザーと同じような身体反応としてとらえられるのだ。( b ) 「怒り」は脳画像のような計測可能な感情として問題になるのであつて、怒りを引き起こしたあなたと私のあいだの人格的交流は問題にされない。( c ) 怒りとは何らかの理由があつてあなたから私へ向けられる出来事であり、本来は計測されるものではない。

行動主義心理学では、研究対象となるのはあくまで客体化された心理現象であり、人間が被験者であつても問題になるのは事物的な反応に限られる。社会的文脈やその人と他の人との人格的な交流は<sup>③</sup>ドガイシされるのだ。現在非常に発達している認知科学や脳神経科学も、(測定に用いる機器は<sup>④</sup>カクダンに進歩したとは言え)研究の基本的な構えにおいては行動主義心理学と変わらない。心はあくまで刺激に対して反応するデータとしてとらえられるのだ。

これまでの議論をふりかえっておきたい。自然科学、社会学、心理学は、人間の経験から独立したデータを求めることで、自然という客体、社会という客体、心という客体を生んだ。三つの客体が生まれるどのプロセスにおいても、(エ)人間の主体的な経験は消されていった。あるいは心理学においてそうであるように、経験そのものがデータとなつて数値へと切り詰められていく。人間の経験は、感覚や感情、体の動きだけにとどまらない。対人関係のさまざまなやりとりや、社会の影響、自然とのやりとりを含みこむ。自然・社会・心の客体化を通じて自然・社会・心が「モノ」あるいはデータになるとき、経験という「やりとり」が視野の外へと消される。

このとき一人ひとりの一人称的な経験と二人称的な交流の価値が切り詰められていく。客観化する学問そのものが悪いわけではない。客観化が、世界のすべて、人間のすべて、真理のすべてを⑤オオい尽くしていると思ひこむことで、私たち自身の経験をそのまま言葉で語ることができなくなることが問題なのだ。

(村上靖彦『客観性の落とし穴』による。一部改変。)

(注) 1 デイヴィッド・ヒューム——スコットランドの哲学者、歴史家、随筆家。

2 ヴィルヘルム・ヴント——ドイツの生理学者、哲学者、心理学者。実験心理学の父と称される。

問1 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に改めよ。解答は記述式解答用紙。

- ① リダツ
- ② ウナガシテ
- ③ ドガイシ
- ④ カクダン
- ⑤ オオい尽くして

問2 傍線部(ア)「この流れが」とあるが、その説明をわかりやすくまとめたものが次の文章である。

文中の空欄 A C に入る最も適当な語句を本文中から書き抜き、記述式解答用紙に記入せよ。ただし、同じ記号の空欄には同じ語句が入る。

西洋近代哲学の出発点であるデカルト以降、心や A を世界や自分の B から切り離し、認識主体としての A を確保して、世界や社会、

B を C として眺め、探究できると考える潮流。

問3 傍線部(イ)「心理現象」とあるが、本文中でこの「心理現象」とは異なる意味で使用されている語句を、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は  。

- ① 計測可能な感情
- ② 心情表現
- ③ ブザーと同じような身体反応
- ④ 事物的な反応
- ⑤ 刺激に対して反応するデータ

問4 傍線部(ウ)「被験<sup>レ</sup>体<sup>ハ</sup>」とあるが、「被験者」と「被験<sup>レ</sup>体<sup>ハ</sup>」の違いを説明したものととして最も適当と思われるものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は  。

- ① 「被験者」は実験者と同じように内省を使って自分の心を観察するが、「被験<sup>レ</sup>体<sup>ハ</sup>」は自分自身の身体も観察して学問の対象として探究する。
- ② 「被験者」は実験者に協力し自ら実験の対象となるが、「被験<sup>レ</sup>体<sup>ハ</sup>」は実験で測定される客体としての対象で、受動的に与えられた刺激に反応する。
- ③ 「被験者」は実験者とは違って自分自身の内面の観察者であるが、「被験<sup>レ</sup>体<sup>ハ</sup>」は内省を使い、自分の心は刺激に対して反応するデータとしてとらえられる。
- ④ 「被験者」は実験者と応答する自分自身の内面の観察者でもあるが、「被験<sup>レ</sup>体<sup>ハ</sup>」は実験で与えられた刺激に反応する一個の身体的反応にすぎない。
- ⑤ 「被験者」は実験者とコミュニケーションを交わし言語による応答もあるが、「被験<sup>レ</sup>体<sup>ハ</sup>」は身体を通して対人関係のさまざまなやりとりをして人格的交流をする。

問5 空欄 ( a ) ( b ) ( c ) にあてはまる語を、それぞれ次の①～⑥の中から一つずつ選べ。ただし、同じものを二回以上選んではならない。

解答番号は a  、 b  、 c  。

- ① たとえば
- ② ところで
- ③ また
- ④ むしろ
- ⑤ すると
- ⑥ しかし

問6 本文全体を読んで、次の「Ⅰ」～「Ⅴ」のそれぞれの文について、本文の内容に当てはまるものに①、当てはまらないものに②をマークせよ。

解答番号はⅠ＝6、Ⅱ＝7、Ⅲ＝8、Ⅳ＝9、Ⅴ＝10。

Ⅰ 世界から切り離して確立された「自己」が確保されたからこそ、世界を客観として眺めることもできるようになったという意味で、デイヴィッド・ヒュームやヴィルヘルム・ヴントも、デカルトの流れを汲んでいる。

Ⅱ 日常生活において心と呼ばれる現象は、私からあなたへ、あるいはあなたから私へという交流の現場で生じるが、実験心理学においては、人工的な実験における刺激や問いかけに対する「反応」が「心」であるともみなされる。

Ⅲ ヴィルヘルム・ヴントの個人心理学では、研究者の内省ではなく、実験で測定された被験者の「心理現象」が学問の対象となっている。

Ⅳ 自然科学、社会学、心理学は、人間の経験から独立したデータを求めることで自然・社会・心という客体を生み、自然・社会・心が「モノ」となって数値へと切り詰められていく。

Ⅴ 自然、世界、人間、真理のすべてを客観化することによって、人間同士のいきいきした経験やコミュニケーションをデータ化し数値化していく学問そのものを筆者は批判している。

問7 次の文は傍線部(エ)「人間の主体的な経験は消されていった」について説明したものである。本文全体をふまえ、次の空欄に入る適当な文章を60字以内で書け(ただし、句読点も一字に含む)。解答は記述式解答用紙。

自然科学、社会学、心理学が自然・社会・心を客体化していく過程で、が切り詰められていくところだ。



第2問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。

東京の小説家が山梨県の御坂峠にある茶屋に滞在していた。そこにはたびたび一羽の大鷲たじが現われ、その大鷲を御坂峠の人たちはクロと呼んでいる。小説家はその鷲が猿をさらっていくところを目撃して驚く。茶屋ではハチ公という犬を飼っており、そのハチ公が吠えほると、大鷲が現われるということだった。

ある日、茶屋に映画撮影の一行がやってくる。その撮影隊の上空にクロが現われる。ところが、撮影隊によれば、伊豆の谷津温泉にいたときにも大鷲が現われ、宿泊先の南京荘の女中が天城山の鷲だと言ったという。その撮影隊と茶店の人との会話を小説家も聞いていた。

(注1) 御坂峠の茶店に泊っている四十男の小説家は、彼も(注2) 谷津温泉の南京荘に出かけようと考えていた。すでに彼は峠の茶店の主人と同じように、クロは御坂峠のクロであると考えていた。八年このかたクロは御坂峠の主であり今後とも同様であるべき筈はずである。それを谷津温泉では、(注3) 天城山の鷲だと言いだしている。峠の茶店の主人もこれには大いに心を悩まして、このまま(注4) この重大問題を等閑にしておいては仕事も手につかぬと言いだした。茶店のおかみさんも、うちの亭主はこの二三日来たいへん瘦ひなせたようだと言いだした。

茶店の主人と四十男の小説家は、崖の鼻で陽向ひなたぼっこをやりながら相談した。

「お客さん、どう思うぞら？ 鷲は山の奥に住むちゆうが、この御坂峠は天城山とか谷津なんどよりも山奥だな？ 誰にきいても無論さういうぞら」

「しかし、一方ではさういう考え方もある。すなわち、クロは御坂峠を根城にして(注4) 笹子から(注5) 黒岳、南は遠く伊豆の天城山まで、彼が広い広い縄張りを持っている。さういう考え方もあるぞら」

「そりゃ、クロ自身とすりゃ、天城山なんか縄張りにするのは朝めし前だ。(注1) 何しろクロは、清濁あわせ呑むのじゃ。しかしながら谷津温泉場で、クロのことを天城山の鷲ちゆうたとは、我慢ならんじゃ」

「その点、同感だ」

「もし天城山の鷲ちゆうのが、クロと別の鷲なら、こりゃ問題でないじゃ。しかしながら、活動写真の一座は何と言った？ あれは天城山の鷲じゃちゆうた。われわれは、悲憤にたえんじゃ」

「それについて、僕は谷津温泉というところへ行ってみたいと思っている。鷲を、実地に見て来るつもりだ」

「それ、それ、うちの望遠鏡を持ってって、とくと見とどけて来ることじゃ」

二人がそういう相談をしていると、坂の下からバスが来て、<sup>(2)</sup>角帽をかぶった学生がひとり降りた。バスの運転手も女車掌も降りて来て、女車掌は清水を汲みとって車に水を入れたり彼女の埃だらけの服にブラシをかけたたりした。運転手は土間にはいつて足を投げ出して椅子に腰かけ、茶店のおかみさんにお茶をついでもらい黄色い饅頭<sup>まんじゅう</sup>をたべていた。

角帽の学生は<sup>(注6)</sup>ライカを富士山に向け、三枚も四枚も同じ風景を写していた。彼は崖の鼻の小説家と茶店の主人のそばに来て、

「絶景ですね、涼しくっていいでしょうね？ 羨ましいなあ」

そう言って崖の鼻の二人にライカを向け、

「すみません、ちょっと点景人物になって下さい」

と言った。

学生は三枚も四枚も同じ位置で撮影して、左様ならとも言わないでバスに乗った。

崖の二人は、そのまま黙ってそこに腰をかけていた。暫くしてから茶店の主人は決定的に言った。

「そうだ、クロを呼んでやろう」

彼はハチ公に吠えさせて、空にクロを呼びよせようとするのであった。

小説家はそこを動こうとしなかった。彼はふところから手帳をとり出して、ながいあいだ費やしてノートをとった。

事実、小説家は崖の鼻に腰をかけ、ながいあいだ費やしてノートをとっていた。それから手帳を懐におさめると、事実、谷津温泉へ出かける用件について思案した。それは先ず出かける前に、ラジオで予め大体の天気を見定めて、東南の風の吹く日に目的地に行くようにする。もし宿に着いても空に謂<sup>い</sup>わゆる天城山の鷺が現われなかったら、女中に鷺の翼の色や、羽根の欠けている恰好<sup>かっ</sup>や飛翔<sup>しょう</sup>する工合など詳しくききだす必要がある。もしクロと同じ鷺ときまったら、その鷺は断じて天城山の鷺というのではないと女中に由緒を明らかにして言いきかせる必要がある。もし女中がそれを上の空できいているようなら、時ならぬチップをどっさりやっつて、彼女の注意をうながすのが良策だろう。場合によっては「おい、番頭を呼べ、番頭を」と重々しく出る方法もある。だが自暴自棄で大酒を飲み「おういこら、県知事を呼べ、県知事を」と叫び、行政問題など口走るような醜態<sup>でくわ</sup>があつてはならないのである。また一方、廊下で女優やその後援者に出会すような場合にも「御坂峠のクロは絶対だ。お邸のクロではないぞ」というように、きこえよがしに言うのも禁物である。<sup>(注7)</sup>それは御坂峠のクロの名折れにほかならぬ。

小説家はいつの間にか、女優とその後援者が谷津の温泉宿に来るものと半ばきめていた。他愛もない妄想だと自分で否定しながらも、その妄想によれば、彼女の後援者はクロのことを不図したお慰みの気で「吾輩の流星号」と言うかもしれないおそれがあった。また彼女はクロのことを「殿様のお邸のクロ」と断定するおそれがあった。(オ) 門閥家の気まぐれというものは、たいてい庶民に勝手ちがいの思いをさせない場合はないのである。

小説家は終バスで出発することにした。幸い茶店のラジオは、明日は晴れ、岳麓は南の風、伊豆湘南地方は東南の風と報じていた。

茶店の主人はハチ公を坂の下から連れ帰って、御飯をどっさり食べさせた。そしてハチが一寝入りすると、ハチの首に縄をつけて黒岳路の道しるべの立札に縛りつけた。

茶店の主人は韋駄天で家のなかに駆け込むと、おかみさんの羽織をすっぽり頭にかぶり四つ這いになって裏口から現われた。ハチ公は低い唸り声を出して怪しい四つ這いをねらったが、この賢い犬は直ぐにそれが飼い主であることを見ぬいてしまった。ハチは背中が痒いかのように身を揉んで両足を前に伸ばし、頭を振ってふざける真似をした。茶店の主人は四つ這いで歩きながら、遠くから小説家に助太刀を求めた。

「わあお客さん、あんたも、異様な風態をしてくれ、頼むじゃあ。二階の押し入れに、女優の忘れてった赤い裏の羽織がある。あれを裏返しにかぶって来るのじや。ハチが吠えるぞら」

小説家は潔く立って

「合点だ」

と言った。

(井伏鱒二「大空の鷲」による。一部改変。)

- (注) 1 御坂峠——山梨県南都留郡富士河口湖町と笛吹市富士御坂町の境にある峠。富士山、河口湖の北側にある。
- 2 谷津温泉——静岡県賀茂郡河津町。伊豆半島の東南、河津川河口近くの南側にある温泉地。御坂峠からは、直線距離で南南東約九五キロメートルのところにある。
- 3 天城山——伊豆半島の中央部に東西に広がる山。天城山は連山の総称。御坂峠からは、直線距離で南南東約八三キロメートルのところにある。
- 4 笹子——御坂峠の北側、山梨県大月市と甲州市との境にある笹子峠のこと。御坂峠からは北に直線距離五キロメートルのところにある。
- 5 黒岳——河口湖の北、山梨県南都留郡富士河口湖町にある標高一七九三メートルの山。御坂峠からは西に約三・一キロメートルのところにある。
- 6 ライカ——ドイツの老舗カメラメーカー。この文章ではライカ社製のカメラを指す。

問1 傍線部(ア)「この重大問題を等閑にしておいては」とあるが、どのような意味か。次の①～⑤のうちから最も適当なもの一つ選べ。解答番号は

11

- ① クロと呼んでいる鷺の縄張りが、御坂峠だけではなく、谷津温泉にも及ぶのかどうかという問題で、真剣に悩んでいる
- ② クロと呼んでいる鷺以外の鷺が、天城山に生息しているかどうかという問題を、いいかげんな噂うわさに引きずられてしまった
- ③ クロと呼んでいる鷺がどこから飛んでくるのか、という問題を、自分たち抜きで勝手に決めることを許しておいては
- ④ クロと呼んでいる鷺が、今後とも御坂峠に来てくれるかどうかという問題を、楽観的に考えて安心したままでは
- ⑤ クロと呼んでいる鷺の根城が、御坂峠なのか天城山なのかという問題を、どちらでもよいと考えて放っておいては

問2 傍線部(イ)「何しろクロは、清濁あわせ呑むじゃ」とは、具体的にはどのようなことを言ったものか。40字以内で答えよ。解答は

記述式解答用紙。

問3 傍線部(ウ)「角帽をかぶった学生がひとり降りた」とあるが、文章の中でこの学生はどのような役割を果たしていると考えられるか。次の①～⑤のうちから最も適当なもの一つ選べ。解答番号は

12

- ① 都会で暮らす育ちのいい人物を出すことによって、田舎と都会の経済的な格差が存在する現実を浮かび上がらせる。
- ② 気ままに自由な人物を出すことによって、それとは対照的な、因習や人間関係に縛られる田舎の閉鎖性を浮かび上がらせる。
- ③ 観光客目線でものを見る人物を出すことによって、他所からは理解しがたい地元のプライドと連帯の熱い空気を浮かび上がらせる。
- ④ 自己中心的な言動をする人物を出すことによって、茶屋の人々が小説家にさり気なく気遣っている日常を浮かび上がらせる。
- ⑤ 自分の世界をしっかりと持っている人物を出すことによって、場の空気を読む茶屋の人々や小説家の言動の特徴を浮かび上がらせる。

問4 傍線部(エ)「それは御坂峠のクロの名折れにほかならぬ」とあるが、この意味について説明した次の文の空欄 一、二 にあてはまる語句をそれぞれ、

5 字以上 10 字以内で入れよ。解答は 記述式解答用紙。

御坂峠のクロだという事実を皆に広めるためとはいえ、  
一 やり方でそれ行うことはクロの  
二 ことになる。

問5 傍線部(オ)「門閥家の気まぐれというものは、たいてい庶民に勝手ちがいの思いをさせない場合はないのである」とあるが、これはどういう意味か。最も適当

なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 家柄の良い人たちの気まぐれな考えは、おおよそ庶民の常識とはまったく逆のものになる。
- ② 家柄の良い人たちの気まぐれな考えは、多くの場合、庶民に場違いな気まぐれさを与えるものになる。
- ③ 家柄の良い人たちの気まぐれな考えは、例外なく庶民にとっては有害なものになる。
- ④ 家柄の良い人たちの気まぐれな考えは、必ずと言っていいほど庶民を馬鹿にしたようなものとなる。
- ⑤ 家柄の良い人たちの気まぐれな考えは、意外と庶民の想定した範囲のうちに収まるものになる。

問6 この文章における構成や表現の特徴を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

14

- ① 小説家が一羽の野性の大鷲の根城を、確かな根拠もなく断定する御坂峠の人々に迎合している姿を、戯画的に描いている。茶店の主人の指示に従って女の羽織を被って道化じみたことをやろうとするところなど、徹底して語り手は小説家を冷笑の対象としている。
- ② 一羽の野性の大鷲を地元の英雄のように考える御坂峠の茶店の主人に感化され、小説家も妄想を逞しくしながら協力していく様子がユーモラスに描かれている。方言交じりの日常会話の中に大げさで硬い言い回しが混じるところも、チグハグなおかしさが出ている。
- ③ 一羽の野性の大鷲の存在が御坂峠の人々に語られているうちに、小説家も巻き込んで神格化されていく過程が、時間を追って客観的に描かれている。茶店の主人が女物の羽織を被って動物に化ける場面には、ユーモラスな中に神事の舞のような厳粛な空気が漂う。
- ④ 一羽の野性の大鷲が天空を自由に飛び回ることと対照的に、人間たちがその鷲をめぐって狭い世界で争う様を描くことで、人間の愚かさを寓話的に示している。動物に化けた姿がハチ公に見破られるところは、自らの愚行に気づかない人間の哀れさが強調されている。
- ⑤ これまで伊豆地方の人から、山奥の田舎者と低く見られてきたことへの御坂峠の人々の憤懣を、一羽の野性の大鷲の根城にこだわることを通して象徴的に描いている。大鷲について小説家と対等に会話する場面からは、御坂峠の人々の矜持が生々しく伝わってくる。

第3問、第4問は受験する学科・専攻によって解答する設問が異なりますので、注意してください。

【大学】情報工学科

経済学科

経営学科

文学科（英米文学専攻、心理学専攻）

教育学科

芸術学科

栄養学科

スポーツ科学科

【短大】現代教養学科

食物栄養学科

幼児教育学科

上記学科・専攻の受験者は、第3問を解答しなさい。

（13 ページ～16 ページ）

【大学】文学科（日本文学専攻、歴史学・考古学専攻）の受験者は、第4問【古文】を解答しなさい。

（17 ページ～20 ページ）

第3問 次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問い(問1〜2)に答えよ。

【文章Ⅰ】

唐突におもわれるかもしれないが、近代の都市生活というのは寂しいものだ。「近代化」というかたちで、ひとびとは社会のさまざまな<sup>びき</sup>、<sup>びき</sup>「封建的」といわれたく<sup>びき</sup>、<sup>びき</sup>身をもぎはなして、じぶんがだれであるかをじぶんで証明できる、あるいは証明しなければならぬ社会をつくりあげてきた。すくなくとも理念としては、身分にも家業にも親族関係にも階級にも性にも民族にも囚われない「自由な個人」によって構成される社会をめざして、である。「自由な個人」とは、彼／彼女が帰属する社会的なコンテキストから自由な個人ということだ。そして都市への大量の人口流入とともに、それら血縁とか地縁といった生活上のコンテキストがしだいに弱体化し、家族生活も夫婦を中心とする核家族が基本となって世代のコンテキストが崩れていった。さらに社会のメディア化も急速に進行し、そうして個人はその神経をじかに「社会」というものに接続させるような社会になっていった。いわゆる中間世界というのが消失して、個人は「社会」のなかを漂流するようになった。

社会的なコンテキストから自由な個人とは、裏返していえば、みづからコンテキストを選択しつつ自己を構成する個人ということである。じぶんがだれであるかをみづから決定もしくは証明しなければならぬということである。言論の自由、職業の自由、婚姻の自由というスローガンがそのことを表している。けれども、そういう「自由な個人」が群れ集う都市生活は、いわゆるシステム化というかたちで大規模に、緻密に組織されてゆかざるをえず、そして個人はそのなかに緊密に組み込まれてしか個人としての生存を維持できなくなっている。つまり、じぶんで選択しているつもりでじつは社会のほうから選ばれているというかたちでしかじぶんを意識できないのだ。社会のなかにじぶんが意味のある場所を占めるということが、社会にとっての意味であつてじぶんにとっての意味ではないらしいという感覚のなかでしか確認できなくなっているのだ。そこでひとは「じぶんの存在」を、すこし急<sup>せ</sup>いて、わたしをわたしとして名ざしする他者との関係のなかに求めるようになる。わたしの存在は他者の意識の宛先となつているというかたちで、もつともくつきり見えてくるものだからだ。こうして私的な、あるいは親密な個人的関係というものに、ひとはそれぞれの「わたし」を賭けることになる。近代の都市生活とは、個人にとっては、社会的なものリアリティがますます親密なもの圈内に縮められてゆく、そういう過程でもあるのだ。

現代の都市生活者の存在感情の底にあまねく静かに浸透してきているようにおもわれる「寂しさ」、それが、いま、だれかと「つながっていたい」というひりひりとした疼<sup>うず</sup>きとなって現象しているのではないだろうか。ケータイはその意味できわめて現代的なツールだ。だれかとの関係のなかで傷つく痛みの方が、身体のフィジカルな痛みよりも、よほどリアルだという、そういう〈魂〉の光景が、そこに映しだされているようにおもう。

(鷲田清一『感覚の幽い風景』による。一部改変。)



## 【文章Ⅲ】

「割に合うかどうか」という観点のみにもとづいて物事の正否を判断する思考法を、「交換の論理」と呼びたいと思います。

「努力は報われる／報われない」という視点ですら、交換の論理の一部をなしています。努力という支払いに見合う報酬があるのかないのかという発想自体が、すでに交換の論理に根差しているのです。

交換の論理は「差し出すもの」とその「見返り」が等価であるようなやり取りを志向し、貸し借り無しのフラットな関係を求めます。ですから、交換の論理を生きる人は打算的にならざるを得ません。

それゆえ、交換の論理を生きる人間は、他人を「手段」として扱ってしまいます。

そして、彼らの言動や行為には「お前の代わりは他にいくらでもいる」というメッセージが透けて見えます。なぜなら、この〈私〉はあくまでも利益という目的に対する手段でしかないからです。

だから信頼できないのです。

つまり、贈与が無くなった世界（交換が支配的な社会）には、信頼関係が存在しない。裏を返せば、信頼は贈与の中からしか生じないということです。だとすると、交換的な人間関係しか構築してこなかった人は、そのあとどうなるのか？

周囲に贈与的な人間がおらず、また自分自身が贈与主体でない場合、僕は簡単に孤立してしまいます。

僕らが仕事を失うことを恐れるのは、経済的な理由だけではありません。

仕事を失うことがそのまま他者とのつながりの喪失を意味するがゆえに恐れるのです。

仕事を失い、かつ頼れる家族や友人知人などがない場合、僕は簡単に孤立する。

（中略）

交換の論理を採用している社会、つまり贈与を失った社会では、誰かに向かって「助けて。」と乞うことが原理的にできなくなる。何も持たない状況では、誰かを頼り、誰かに助けを求めることが原理的に不可能なのです。

（近内悠太『世界は贈与でできている』による。一部改変。）

問1 Kさんは授業で【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、「現代社会」について自分の考えを整理するために、次のようなメモを作成した。Kさんが作成したメモの空欄 A E に入れるのに最も適当な語句を、本文中から抜き出して書け。解答は記述式解答用紙。

【Kさんのメモ】

(1) 共通している要素 どちらも「現代社会の課題」について論じている。

(2) 「現代社会に対する認識」の違い

【文章Ⅰ】 近代の都市生活は、個人を A から自由にする一方、個人を社会の B の中に緊密に組み込み、じぶんの C に不安を感じさせる結果をもたらせた。それゆえ、だれかと「つながっていたい」という「寂しい」ひとたちが出現したのである。

【文章Ⅱ】 相手が割に合うかどうかで判断する「交換の論理」では、他人に対価を求め打算的になる。贈与のない社会では D が存在せず、また誰かの援助を求められず、人々は孤立する。それゆえつながりの E を恐れるのである。

(3) 自分の考え

F

問2 Kさんは【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、自分の考えを書いた。空欄 F に最もあてはまるものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 15。

- ① 【文章Ⅰ】は、中間世界の消失によって「社会」の中に漂流する近代の都市生活者は、自分の存在に無関心である他者を求めてきたと述べている。それゆえ、自分の存在価値を高め、自立して生活していききたいと考える。
- ② 【文章Ⅱ】は、交換の論理を採用している社会とは、他人を目的のための手段としか考えず、物事を損得で考える社会であると述べている。それゆえ、時には誰かに頼り、他者とのつながりを大切にしたい社会を築いていききたいと考える。
- ③ 【文章Ⅱ】は、贈与がなくなった社会では、誰かに依存し、誰かに向かって大きな声で援助を求めなければならないと述べている。それゆえ、誰一人取り残すことがない、扶助し合えるような温かな社会を築いていききたいと考える。
- ④ 【文章Ⅰ】は、誰かとつながっていたいと思う人たちが増え、電車内で携帯電話ばかりを見ている人が増えていと述べている。それゆえ、人間同士のつながりをつくれるような豊かなネットワークを構築していききたいと考える。
- ⑤ 【文章Ⅱ】は、他者のことを手段としてしか見なさない人が多い社会では、何か裏があるのではないかと疑ってみる必要があると述べている。それゆえ、それぞれが冷静に判断し、一人でも生きていける社会を築いていききたいと考える。

第4問【古文】 次の文章は『方丈記』の一節で、遷都について記している。これを読んで後の問いに答えよ。

また、<sup>(注1)</sup> 治承四年 (a) 水無月の頃、にはかに都遷り侍りき。いと思ひの外なりし事なり。

<sup>(b)</sup> おほかたこの京のはじめを聞ける事は、嗟<sup>さ</sup>峨<sup>が</sup>の天皇の御時、都とさだまり<sup>(c)</sup>にけるより後、すでに四百余歳を経たり。<sup>(c)</sup> ことなるゆゑなくて、たやすく改まるべくもあらねば、これを世の人安からず憂へあへる、げにことわりにも過ぎたり。されど、とかくいふかひなくて、帝よりはじめ奉りて、大臣公卿みなことごとく移ろひ給ひぬ。世に仕ふるほどの人、たれか一人ふるさとに残りをらむ。官位に思ひをかけ、主君のかげを頼むほどの人は、一日なりとも疾く移ろはむとはげみ、時を失ひ世にあまされて、期する所なき者は、憂へながらとまりをり。軒を争ひし人のすまひ、日を経つつ荒れゆく。家はこぼたれて淀河にうかび、地は目のまへに島<sup>はたけ</sup>となる。人の心みな改まりて、<sup>(d)</sup> ただ馬鞍<sup>うまくら</sup>をのみ重くす。牛車をようする人なし。西南海の領所を願ひて、東北の庄園<sup>しやうえん</sup>を好まず。

その時、おのづから事のたよりありて、津の国の今の京に至れり。所のありさまを見るに、南は海近くて下れり。波の音つねにかまびすしく、しほ風ことにはげし。内裏は山の中なれば、<sup>(注2)</sup> かの木の丸殿もかくやと、なかなかやうかはりて、優なるかたも侍り。日々にこぼち、川も狭<sup>せ</sup>に運びくだす家、<sup>(ウ)</sup> いづくに作れるにかあるらむ。なほ空しき地は多く、作れる屋は少なし。古京はすでに荒れて、新都はいまだ成らず。ありとしある人は皆浮雲の思ひをなせり。もとよりこの所に在るものは、地を失ひて憂ふ。今移れる人は、土木のわづらひある事を歎<sup>なげ</sup>く。道のほとりを見れば、車に乗るべきは馬に乗り、衣<sup>い</sup>冠<sup>くわん</sup>布衣<sup>ほい</sup>なるべきは多く、<sup>(注3)</sup> 直垂<sup>ひたれ</sup>を着たり。都の手振りたちまちに改まりて、ただひなびたる武士<sup>ものふ</sup>に異ならず。

(注) 1 治承四年——一一八〇年。

2 かの木の丸殿——齊明天皇の行宮であつた朝倉宮を指す。朝倉宮は丸木で作られていたとされる。

3 直垂——衣服の一種で、主に武士が着用した。

問1 二重傍線部 (a) (b) (c) の文中の意味として最も適当なものを、それぞれ次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は a ㉡ 15、 b ㉡ 16、 c ㉡ 17。

(a) 「水無月」

- ① 二月
- ② 四月
- ③ 六月
- ④ 八月
- ⑤ 十月

(b) 「おほかた」

- ① 公式に
- ② 詳細に
- ③ 一説に
- ④ 一体に
- ⑤ 絶対に

(c) 「ことなる」

- ① 異常な
- ② 特別な
- ③ 愚かな
- ④ 納得できる
- ⑤ 変わっている

問2 傍線部 (ア) 「に」の文法的な説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 格助詞
- ② 接続助詞
- ③ 完了の助動詞の連用形
- ④ 断定の助動詞の連用形
- ⑤ 形容動詞の活用語尾

問3 傍線部(イ)「馬鞍をのみ重くす」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

19

- ① 遷都の前は、移動手段として牛車よりも馬が好まれた。
- ② 遷都の前は、馬の鞍を重く飾りつけることが好まれた。
- ③ 遷都の後には、移動手段として牛車よりも馬が好まれた。
- ④ 遷都の後には、馬の鞍を重く飾りつけることが好まれた。
- ⑤ 遷都の後には、移動手段として馬よりも牛車が好まれた。

問4 傍線部(ウ)「いづくに作れるにかあるらむ」に込められた作者の感慨として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

20

- ① 家を建て替えたとしても住まう人がいないことを憂いている。
- ② 家々が集まる場所こそが新しい都になるだろうと予感している。
- ③ 新しい京にこぞって居を移そうとした人々の将来を懸念している。
- ④ 人々が家を運んでいる川はどこに流れつくのかに興味を抱いている。
- ⑤ 近い将来に自分も転居を迫られるのではないかと焦っている。

問5 この文章の内容に合致しないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① 津の国に遷都されることになった時には、不安を感じる人が多かった。
- ② 天皇や大臣などが新しい京に移り住んだことで、地方は荒廃してしまった。
- ③ 作者は新しい京を訪れることになったが、自分から望んだわけではなかった。
- ④ 新しい京は完成する途上であったため、人々の間には混乱が生じていた。
- ⑤ 作者は、遷都によって人々の暮らしまでもが変わったことを悲しんでいる。

問6 『方丈記』より後に成立した作品として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 『源氏物語』
- ② 『今昔物語集』
- ③ 『後拾遺和歌集』
- ④ 『枕草子』
- ⑤ 『徒然草』

**2023(令和6)年度 金沢学院大学・金沢学院短期大学  
一般選抜 I 期（2日目／2024年2月1日実施）  
解答例【マーク式】**

<b>国語 【国語総合】</b>			
	解答番号	正解	配点
第1問	1	②	3
	2	④	4
	3	③	2
	4	①	2
	5	⑥	2
	6	②	3
	7	①	3
	8	②	3
	9	①	3
	10	②	3
第2問	11	⑤	3
	12	③	3
	13	①	3
	14	②	3
第3問	15	②	5

マーク	45
記述	55
計	100

<b>国語 【国語総合+古文】</b>			
	解答番号	正解	配点
第1問	1	②	3
	2	④	4
	3	③	2
	4	①	2
	5	⑥	2
	6	②	3
	7	①	3
	8	②	3
	9	①	3
	10	②	3
第2問	11	⑤	3
	12	③	3
	13	①	3
	14	②	3
第4問	15	③	2
	16	④	2
	17	②	2
	18	③	2
	19	③	3
	20	③	3
	21	②	4
	22	⑤	2

マーク	60
記述	40
計	100



記述式解答用紙 「国語」

解答例

志望学科	受験番号
学科	氏名
専攻	専攻

※専攻は「文学科」「教育学科」受験の場合に記入してください。

第1問

④	①
格段	離脱
⑤	②
覆い尽くして	促して
配点各	③
2	度外視

問2	A	自己	B	経験	C	客観(客体)	各配点	2
----	---	----	---	----	---	--------	-----	---

と	人	経
消され、	人間の経験と	験そのものが
社会的文脈や人格的な交流の価値	社会的文脈や人格的な交流の価値	社会的文脈や人格的な交流の価値

第2問

繩張りの中の各所に現れるということ	クロが細かい場所の良し悪しにこだわらず、
-------------------	----------------------

問4	二	一
	名誉を傷つける	品性が疑われる
	配点各	5
		配点
		8

第3問

問1	E	C	A
	喪失	存在	社会的なコンテキスト
	配点各	D	B
	3		組織(「システム」も可)
			信頼関係